
『ランバ・ラル特攻！』より

コウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ランバ・ラル特攻！』より

【Nコード】

N3500I

【作者名】

コウミ

【あらすじ】

『機動戦士ガンダム』テレビシリーズ第19話より。

「あんな子が欲しいのか？」

ちらりと僕の方を仰ぎ見ながら、男が言った。

その口調に聞こえよがしのわざとらしさは無かった。が、「あんな子」当人に見てみたら、遠慮がなく、ひどく無作法なものの言い方に聞こえた。

男の問いに対して、あの人が静かな笑みをたたえて答えた。

「ふふ……そうね」

ハモンと呼ばれるその人と、再び目が合った。

ガサツな男たちの集団の中に一人女性が混じっている。なんとも異質な感じがした。

その人は 近寄りがたい気高さと香り立つような上品さの持ち主だった。

正直、どきりとするほどの美人だ。

こちらからの視線を受けて、その人がほほ笑みかけてきた。

僕は、戸惑いと苛立ちの入り混じった奇妙な気持ちで背を向けるしかなかった。

その時、僕はとても疲れていた。

全長十八メートルもの巨大な鉄の塊を地中に埋めるという、とてもない規模の砂遊びのあと、歩きづめに歩いてようやく町にたどり着いたのだ。

そこは 寂れたレストランではあったが、日陰に飢えていた者にとってはまさにオアシスだった。

僕はカウンター席の一角を陣取り、水と食事を注文した。そして喉の渇きと空腹を満たすため躍起になっていた。だから、地鳴りのような振動と騒音を響かせて大型トレーラーがレストランのすぐ脇に横付けされた時は、自分がどういう状況にいるのかすぐには判

らなかった。

その後すぐ、店内に無骨な男たちがぞろぞろと入ってきたのを見た途端、驚きのあまり、それまでの疲労感が一気に吹き飛んだ。

ジオンだ！

僕はあやうくバケットを喉に詰まらせそうになった。

「オヤジ！ 休ませてもらうぞ！ 十三人だ！」

軍服を着た連中が、どやどやとテーブルを占領していく。

こんなにも近くに、今まで闘ってきた敵がいる。

心臓が否応なしに高鳴った。

落ち着け 知らん顔して民間人を装っていればいいことだ。

僕は、そう自分自身に言い聞かせた。

ホワイトベースを飛び出して来た僕は、軍とは無関係のはずだった。とはいえ、こんなに大勢の敵の兵士たちと同じ空間を共にするのは、あまり気分のいいものではない。

僕は食べかけの食事を飲みくだすように胃におさめるとカウンターの向かい側にいるマスターに、軍から支給されたかなしの紙幣を手渡した。

出来るだけさりげなくスツールから滑り下りた僕は、あの人ハモンと呼ばれる女性の座る席へ歩み寄った。

本当はこのまままっすぐレストランから立ち去りたかったのは言うまでもない。

しかし、すぐにそう出来ないのには理由《わけ》があった。

その人は店の出入り口に程近い窓を背にした位置に座っていた。間近で見ると、その美しさに気圧されるかのようだった。

この人はなぜ、こんな戦場で兵士たちに混じって行動しているのだろう？

こんなアンバランスな光景があるだろうか？

その人のすぐ間近には、あの男　ランバ・ラル隊長と呼ばれる中年将校の広い肩幅があった。僕はなるべく男の方を見ないようにした。

その人は店のマスターに十四人分の食事を注文した。しかし、隊のメンバーは十三人だという。それは明らかに僕に食事をおごってくれるという意図があつてのことだった。

好意　かもしれないかった。

しかし、その時の僕はそうは思わなかった。

誓つて言う。

僕はその時、進んで施しを受けようなどとは思っていなかったし、物欲しそうな顔をしていたわけでもない。

ましてや、こちらからおごつてくれなどと頼んだわけではないのだ。

憐れに思われたのかもしれない。

そんな考えが頭をもたげた。　　なんだか自尊心をひどく傷つけられたような気がした。

僕は、食事をおごつてくれるというその人の申し出を、できるだけ丁寧に断った。

案の定、その人は「なぜ？」聞き返してきた。

さも「心外だわ」という顔つきで。

しかし、それは単なる素振りだ。本心ではない。

「貴方に物を恵んでもらう理由がありませんので」

僕は素直にそう告げた。

今にして思うと、もっと他に言い方があつただらうに、と思う。なんて不躰で礼を欠いた言い方なんだろう、と。

周りにいたジオン兵たちが小さく息を飲むのが分かったが、あの人は動じる様子がなかった。いや、むしろ僕の一挙一動を楽しんでいるようにも窺えた。

いきなり。　　。　　際に座る男　　ランバ・ラルが豪快な笑い声を

あげた。

「ハモン。一本取やられたな？ この小僧に」

その目が心底、可笑しそうに笑っている。

「君のことを私が気にいったからなんだけど、理由にならないかしら？」

「え？」

これは予想にもしていなかった

「そ……そんな……」

なめらかな喋り口調でそう返されて、僕は口ごもり、しどろもどろになった。

「小僧。ハモンに気に入られるなぞ、よほどのことだぞ？」

ランバ・ラルが試すような眼差しを向けた。

それから堰を切ったように幾人の兵士たちから次々に冷やかしの声があがった。

「バチが当たる」だの。「あやかりたいくらい」だの。「男冥利につきる」だの。

僕はますます寄ってたかつて遊ばれているようで、不快の感情が沸き起こった。

やっぱりこの人は、いやここにいる大人たちは全員僕のことを憐れんでいるんだ。そうに違いない。

「僕、乞食じゃありませんし」

「気に入ったぞ！ 小僧！」

ランバ・ラルが早すぎるくらい、すぐさま反応した。そして、すつくと立ち上がり僕の肩を鷲づかみにした。

今にして思えば、あの人に対する気遣いもあったのだろう。それに兵士たちとのごたごたを避けるためだったのかもしれない。

実際あれだけきっぱりと言い切った僕は、いかにも血の気の多いジオン兵たちに袋叩きにあってもおかしくないはずだった。

「ハモンだけのおごりじゃない。儂からもおごらせてもらう。なら、

食っていけるだろう？ ん？」

そのランバ・ラルの言葉が合図となった。

どこからか椅子が、兵士の手から手へと渡りランバ・ラルのすぐ隣に設えられた。

これ以上、連中と関わりたくないうえに、テーブルを共にする羽目になってしまった。

僕は、この状況にすっかり途方に暮れた。

その時。

「隊長！！ 怪しい奴を捕まえました！！」

「なに？」

ランバ・ラルの顔から、それまでの親しげな笑みが拭い取られ、顔つきがみるみる険しくなった。

ランバ・ラルは踵を返し、僕の脇をすり抜けるようにして店の入口へと歩み寄った。

「スパイか！？」

「は！ 行動不審の女が！」

店の撥ね扉が勢いよく開き、飛び込むようにして見張り役のジオン兵と 見覚えのある人物が入ってきた。

僕はハツとなって大きく息を飲んだ。

フラウ・ボウ ！！

なぜ彼女がこんな場所にいたのかは、すぐに察しがついた。ホ

ワイトベースを飛び出した僕を追いかけて来たんだ。いや もし かしたら。うえからの命令でやって来たのかもしれない。

フラウは、ジオン兵士に両方の腕を後ろ手で掴まれ、更にきつくねじ上げられているらしく苦痛で顔を歪めていた。

「あなたのお友達ね？」

僕はぎくりとして振り返った。

見ると、あの人がちちに射抜くような鋭い眼差しを向けている。

僕の反応を見て察しがついたのだろう。

その時、僕は否定することも出来たし、口でうまく誤魔化すことだつて出来たはずだった。

が 先ほどまで親しげな笑みを浮かべていたあの人とはうって変わった冷淡な様子の前では、僕はほんの小さな子どもにすぎなかった。

その人が見つめる視線に耐えきれず、僕は顔を背けながら小さく「はい」と、呟いた。

入口付近ではランバ・ラルと見張り兵とのやり取りが続いていた。

「なんだ、子どもじゃないか」

「しかし、コイツの着ているのは連邦軍の制服です」
捕まる ！

僕は咄嗟にそう思った。と、同時に、僕の脳裏にはあのコズンというザクのパイロットの姿が浮かんだ。銃をつきつけられ、両手を挙げて連行されていく姿が。

僕はゆっくりと慎重にジーンズの腹の部分に差し込んだ拳銃へと手を伸ばした。勿論、羽織っているブランケットに隠れているので誰にも見つかることはない。

「ふむ そうかな？ ちょっと違うぞ」

「間違いありません」

「そうなのか？ ハモン」

問いかけるランバ・ラルがあの人に向きなあった。

「さあ。そうらしいけど。その子、この子のガールフレンドですって」

いかにも素っ気なく、どうでもいいような口ぶりだったが、その言葉を聞くなりランバ・ラルの眼光が鈍く光った。

「アムロ！？」

辺りの雰囲気を観察したのか、フラウがようやく僕の存在に気がついていた。

子どもとはいえ、相手が連邦軍の者だと知れた以上、ただでは済まされないのは分かり切っていた。

ましてやこのまま逃してくれるなど、考えられないことだ。

二人とも捕虜にされるに違いない。

そして尋問を受け。そして。

「放してやれ」

「や。しかし」

「いいから」

フラウが兵士の縛めから解放された。

ランバ・ラルがまっすぐこちらを見据えながら、ゆっくりと歩み寄って来た。

周りには敵しかいない。絶望的と言ってもいい状況だった。

ここで銃撃戦をする覚悟もなければ、フラウを連れて逃げ出す余裕もない。

できることといったら視線をそらすことなく相手の目を、しっかりと睨みつけることだけだ。

「いい目をしているな」

ランバ・ラルの低く重厚な声色が威圧するように響いた。まるで人を試すような口ぶりだ。

一見すると口髭を生やしたただの中年男性だが、隊のリーダーらしい威厳と精悍さが感じ取れる。

がっちりとした体格は逞しく、思いのほか長身たくまだったのだ、彼と目と目を合わせていた僕は視線をやや上に移さなければならなかった。

ランバ・ラルは、それほど間近に迫っていたのだ。
出し抜けに。

衣ずれの音と共に拳銃を握り締めた右手が、ひやりとした空気に曝^{さら}された。

それが何を意味するのかを一瞬で覚った僕は、あっと声を上げそうになった。

しかし、僕を見つめるランバ・ラルの泰然とした表情には何の変化も見られない。

執拗に絡みつく視線から逃れ、僕は自分の手元に目を落とした。やはりだ。

ブランケットの布端が捲られている。

ランバ・ラルは顔色一つ変えずに僕を見据えたまま、隠し持っていた武器を暴いたのだ。

「それにしてもいい度胸だ。ますます気に入ったよ。……アムロとか、いったな？」

「……」

僕はカラカラになった喉からようやく声を絞り出した。

「……はい」

冷汗が背中をつたって流れ落ちた。

その時の僕は、さながら蛇に睨まれた蛙のように、頷くという僅かな動作さえも叶わない状態だった。

この場が一体どのように治まるのか　などということすら思い浮かばない。

怯えていた。というよりも、目の前の敵将に脅威を感じていたのだ。

「しかし、戦場で会ったならこうはいかんぞ？　頑張れよ。アムロ君」
言いながら、ランバ・ラルは握っていた布端をそつと元に戻した。彼の厚い胸板が僕の目前から離れいく。

どんな目に遭うのかと身を強張らせていた僕は、それでも、詰めていた息を大きく吐き戻すのをぐっと堪えた。

なんと返したらいいのか。

考えあぐねている僕の目に、あの人　ハモンという女性が再び柔らかな笑みを浮かべ、興味に満ちた眼差しをこちらに向けている様子が映った。

見透かされている。多分、すべて　。

そんな考えが一瞬頭を掠めた。^{かす}

ランバ・ラルが椅子を引き、元いたテーブルについた。

その広い背中中は明らかに「行け」と言っている。

「はい……。ランバ……。ラルさんも……。ハモンさんも……。ありがとうございました」

平然と言葉を継ぐのにはやや努力を要したが、何とかクリアした。周りを埋め尽くすジオン兵たちの視線を精一杯無視して、僕はそそくさとその場を後にした。

安堵の表情を浮かべるフラウを促し、レストランから出たあと、僕らはバギーに乗り込みソドンの町を飛び出した。

レストランを出てからこっち、フラウはずっと不機嫌だった。

敵の手から逃れて安心した反動なのだろうと、僕は適当に言葉を返してた。

本当だったら「大丈夫だったかい？」とか「怖かっただろう？」

とか、声をかけてあげるべきだったのだろう。

あの時の僕には思いやりが足りなかったというのは認める。

だが、仕方がない。僕だって一杯一杯だったんだ。

それに、彼女にはあまり見られたくないところを見られてしまったという負い目もあった。

決して恰好がいいとか悪いとか、そういう問題ではないけど……。

「あの女の人が見てたから私と手をつなぐのやめたんでしょ？」

女の子って時々理解できなくなる。

正直、あの時は手をつないでいたことすらよく覚えていなかった。しかし、あまり正直すぎるのも野暮だと思っていたので、僕は短く答えた。

「違つよ」

「うそ！」

僕はこれ以上何を言っても無駄だと思い、口を噤んだ。

寂れた町並みが遠くに霞むくらい離れると、僕はバギーを停車させた。

「ホワイトベースへは行かないの？」

バギーから降り、短く別れの言葉を告げると、フラウが堪りかねたように言った。

「ああ」

僕は無然としたまま答えた。

「さつきは私……あんな事言っちゃったけど、本当は皆アムロのこ
とアテにしてるのよ。ブライトさんだって」

「行けよ。早くしないと日射病になるぞ」

最後まで言い終わらないうちに、僕はわざとフラウの言葉を遮った。

案の定、フラウはかなり気分を害したようだった。

「後悔したって知らないから」

「……。誰が後悔なんか」

「そつかしら。ホントは後悔してるくせに」

カチンときたのは、凶星だったからだろう。

「一人ならなんとでも生きていけるさ」

「強情ね！」

フラウがアクセルを吹かし、砂埃を舞い散らせながらバギーを
車させた。

その時の僕たちは、お互いの気持ちがすれ違っていた。

いや、というよりも僕の方から彼女を突っぱねた形となり、彼女
も彼女で勝気な所を抑えることが出来なかったらしい。

「後悔なんかするもんか！」

僕は大声を張り上げたが、遠ざかるフラウの耳に届いたかどうかは分からなかった。

否定はしない。

あれは苛立ちと

ほんの少しの負け惜しみをも含んだものだった。

（後書き）

このお話は、お友達の絵とのコラボ作品として書かせていただいたものに後半部分を加筆したものです。

ソドンの町のレストランでのアムロとランバ・ラル、そしてハモンとの出会いの場面を文字におこしてみました。

若干アレンジが入っています

アムロの心情の解釈はコウミの想像と独断ですw
楽しく書かせていただきました^^

コウミ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500i/>

『ランバ・ラル特攻！』より

2011年7月3日03時37分発行